

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4370104855		
法人名	社会福祉法人 リデルライトホーム		
事業所名	グループホーム カムさあ		
所在地	熊本県熊本市龍田陳内3丁目37-7		
自己評価作成日	平成24年10月1日	評価結果市町村受理日	平成25年1月9日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://search.kaigo-kouhyou-kumamoto.jp/kaigosip/Top.do
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなる福祉サービス評価機構		
所在地	熊本市南熊本三丁目13-12-205号		
訪問調査日	平成24年11月21日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

当法人は社会福祉法人リデルライトホームが運営している。カムさあは、小高い山の上であり、新興住宅地でありながらも自然も豊かにあり居住場所としてはより良い環境である。室内は全てバリアフリーになっており、洋室9室の1ユニットで運営している。基本運営理念として「その人らしく」「自己決定」「自己実現」「だれからも拘束されない」などを掲げ、その方らしく生きることのできる施設運営に取り組んでいる。我が家のようにくつろげ、最後までその人らしく生きることを支援しながらも、ご家族の絆を大切にすることをケア理念にしています。ご本人のペースで自分らしく暮らしていただけるよう、主治医と連携を図りながら、ご希望があれば看取り介護の実践にも取り組んでいます。併設施設にデイサービスがあり、同校区の知的しょうがい者の施設に昼食を委託している。住み慣れた地域で最後まで尊厳のあ

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

小高い丘の上に立つホームは、関係者の手で併設デイサービスと共有する庭や建物内・外の美化に力を注ぎ数年を経ても変わらぬ清潔感で訪れる者を迎えている。法人の基本精神を受け継いだホーム理念は「これぞ理念」と言うにふさわしく、入居者への支援はもちろんのこと、職員の専門職としての心構えなど全てに亘りその思いを運動させながらホームを運営している。外部評価には事前にひと月をかけ全職員が全項目について自己を振り返り評価することが定着しており、内外の研修と併せ、自己研鑽に努め、個々の質を高めながら休職中の職員への情報提供やレポート提出、男性職員への育児休暇支援等、手厚い福利厚生により離職のない職場環境をホーム全体で作りに上げている。縁あって入居された方の“看取り支援”には他の入居者も心の応援隊となり全員で支援する等、人が人に関わる仕事のすばらしさを感じさせるホームである。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者や職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	理念は、職員が日々目にするよう掲示すること、生活の中に自己決定できるように支援している。また、自分らしく暮らすことができるよう、ケアの方針で迷うことがあれば、理念に立ち返りケアするように努力している。	法人の人間尊重の精神をホーム理念四項目に込め、一人ひとりの入居者の生き方、暮らしかたに寄り添い、その持てる力を最大限に発揮できる環境作りを長期的なスタンスで見据え支援している。又、ケアに更に密着した介護理念三項目は毎年、見直し長文を避け入居者にも分かりやすい表現により、一緒に言葉に出して読み合わせる等、入居者を主人公として共に取り組むホームを形成している。理念は家族や来訪者にも紹介され、その基本精神はしっかりと定着している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自身が地域の一員として日常的に交流している	地域のみなさんと日常的なあいさつのみでなく、消防訓練や地域行事・子ども会の廃品回収などに参加することで地域とのつながりを大切にしている。また、自治会にも加入させていただき、回覧板を活用し情報の発信などにも活用している。	子供会の廃品回収の協力、神社の祭り、お寺の「甘茶会」への参加等、地域行事との関わりを継続しながら、昨年より自治会に加入し、回覧板のやり取りや清掃活動へ職員が参加して、地域交流を前進させている。中学生のナイスライの受け入れやボランティアの訪問、併設ディサービスとの日常的な交流や日々の散歩など、入居者が地域との繋がりを保ちながら生活する基盤として大切に支援している。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	日常的に行っているケアの積み重ねを、運営推進会議などで認知症の方への接し方やケアの方法を話し合う場を設けている。また、地域向けの勉強会も積極的に取り組み理解を深めていただけるように努力している。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議では、自己評価・外部評価を配布し、職員が回答した内容や課題を項目別に報告している。また、率直なご意見をお聞きできる良い機会であると共に、ご意見をサービス向上に活かす取り組みを継続したい。	運営推進会議がホーム運営に十分に活かされる様、取り組みや活動内容を報告しながら、参加者のそれぞれの立場から広く意見を吸い上げている。この夏の大規模水害では被災地でボランティアとして活動されたメンバーも居られ、災害対策を議題として、行政との協定により「福祉避難場所」として法人が災害時の高齢者や障害者の避難先となった経緯やホームとして出来る地域貢献について紹介し現在、独居の方1名を災害時の要援護者として登録している。	推進会議には、入居者や家族の代表者が参加しているが、参加されていない家族へも議事録を開示する事で共有化を図り、更なる意見や提案に繋がることに期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	運営推進会議開催の際、地域包括支援センターの職員に参加していただくと共に、運営に関することは、熊本市役所の担当者に確認するなど、気軽に相談にのっていただける。又、介護サービス支援員の方に月1回来て頂き、サービス向上に努めている	包括センター職員の推進会議への毎回の参加や、書類提出で管理者は区役所や本所に足を運び適切な助言を得ている。月に一度の介護支援員の来所時には、第三者からみたホームへの気づきを遠慮なく話してもらいながら、サービスに反映させている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束については、毎月身体拘束廃止委員会の中で、身体拘束が事業所で行われていないかお互い確認をして、法人全体で身体拘束がないケアを行っている。定例的な勉強会を行い、安全に暮らすことができる環境づくりに努めている	身体拘束廃止委員会を通じて法人全体で拘束について正しい認識を持ち、スピーチロックを含むいかなる拘束も行わない事を基本としている。小柄な入居者からの目線で男性職員が威圧的に見えないよう腰を折って対応する事や、ケアの際に入居者に指のあとを残していないか等、細やかなボディチェックを実践している。職員は介助の途中に「○○しますよ、もうすぐ○○ですよ」と言った次の行動や行為を言葉かけしながら対応している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	職員は職員会議や研修会で虐待について学ぶ機会を定期的に設けている。日常的には、入浴時のボディチェックを行い、外傷がないか皆で確認する体制になっている。また、言葉の虐待については、職員間で注意するよう日々心がけている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	後見制度を活用されている方がおられる。認知症と権利擁護は非常に密接な関わりがあるため、ご入居の段階でご家族へ分かりやすく説明している。また、パンフレット等も用意している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時に、十分な説明を行うように努力しているが、一度に多くのことを説明させていただいたため、契約後も疑問点やご不明な点がないか、お伺いするよう心がけている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	入居者やご家族からのご要望についてはお話を良くお聞きし、その方らしい生き方ができるようにケアに反映させている。また、運営推進会議などで話題にするようにしている。開かれた施設づくりに今後も努力する。	職員は入居者との日頃の関わりの中で自然に要望を引き出している。推進会議やホーム行事で家族からの意見や要望を収集しながら、面会時には必ず入居者の近況を報告して、家族の更に細かい思いを確認している。顔写真入りの職員紹介をひらがな表示に変えたり、新しく作り変えたホームのパンフレットにも入居者や家族の意見が反映されている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	日常的に職員の意見を聞く機会を設けている。環境次第で職員の意見が出なくなるので、意見を言いやすい環境づくりに常に心がけている。管理者は、代表者と事業運営について意見交換する機会を月に1回以上設け運営に反映させている。	管理者は普段から職員が自由に意見を出し合えるホームの雰囲気作りを心がけており、物品購入など入居者の生活に直結する物については早期に対応が図られている。キャリア形成のための法人間での異動はあるものの、離職のない職場環境は実習生がそのままホームに就職されたことにも表れている。管理者は職員自らが意見提案に自信を持って発言することも重要だとしている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	やりがいや向上心を持つことができる。施設内外の研修会の他に、キャリアに合わせたキャリアアップ研修を各段階に合わせ開催している。給与については、1年毎の昇給や夏季休暇・冬季休暇・年休など取りやすい環境になっている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	施設内研修を年10回以上・その他、勤続期間に準じ初級・中級・上級職に分類し、適正な研修内容になるよう内容を3タイプ用意している。教育システムは充実している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	地域行事に参加したり、自治会を通じた交流もあり、子ども避難所の指定をもらっている。また、グループホーム協議会を各区割する予定もあり、職員が気軽に研修会や同職種の交流に参加できるように整備中である。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居初期はできるだけ安心して過ごしていただけるよう話しやすい環境をつくり、できるだけ傍で話が聞けるようにしている。ご本人の意見を尊重し、安住の場となるようこれからも努力していく。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	安心してご家族をご入居していただけるよう、不安や要望等を気軽にお話いただけるよう、より良い関係が築けるよう努力している。また、ご家族の話にも耳を傾け、その方らしい生き方ができるよう今後も務める。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	その方らしく生活していただけるよう、必要とされる支援は、他サービス利用も含め、必要とされる支援に優先順位をつけながら、実施できるように努力している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	個々の個性や持ち得る力を発揮できるような関わり方を常に行っている。共に過ごすことで信頼関係を構築し、それぞれが生活の中に役割をもつことができる関係づくりを心掛けている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	ご本人にとって家族は大切な方であることを職員は理解している。面会時は、ゆっくり過ごしていただけるよう日頃よりご家族の絆を大切にできるよう心掛けている。また、近況をご報告し、ご要望を聞きながら共に支える関係を努力している。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	職員は、ご本人がこれまでに大切にしてきた方や場所を断ち切らないことを理解している。また、大切な物や気持ちも途切れないような環境づくりをしている。ご家族・職員付き添いで馴染みにの場所に出かける支援もしている。	家族の協力を得ながら自宅や実家への里帰り、定期的な教会訪問、行きつけの商店や銀行への外出等入居者の希望により馴染みの場所へ出かけている。高齢化が進む中、外出が難しくなった方へも家族の面会や自宅により近い居室環境を整え、個々の暮らし方に焦点を合わせ支援している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずにご利用者が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	入居者の関係性を理解した上で、入居者同士が関われるようにしている。席の位置や家事の内容を工夫してより良い関係が気付けられるようにしている。また、職員が間に入り話題づくりにも心掛けている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	ご利用が終了しても関わりを継続できるようにしている。出会えたご縁を大切にご本人やご家族の相談内容に耳を傾け、出来ることを職員で考える姿勢を継続している。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	ご本人の意向・希望が叶うケアの実践を行っている。一人ひとりに合わせたケアを行い、「その人らしさ」「その方のQOL」等を考えながら日々ケアを行っている。また、今後も思いやりをもったケア基本に努力してゆきたい。	入居者の中にはハッキリと自分の意向を表現する方もおられるが、困難な場合には表情やしぐさ等普段の様子から読み取り家族の意向と併せ、本人本位に検討している。ホームが理念として掲げる“その人らしさ”や個々の生活や人生の質を追究しながら入居者の思いをプランに繋げている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	その方らしく生きていただくために、これまでの生活内容を理解し、その方に合った暮らし方を基本に各職員が収集した情報が活かせるよう支援に努めたい。		

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日々の記録表を24時間表を活用していることで、食事・睡眠・排泄・余暇の過ごし方・リハビリ等を時間を軸にして記録するようにしている。3か月～6か月毎にモニタリングを実施することで、現状の把握に努めるチームケアを実践している。			
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	定期的なモニタリングを通じ、入居者の今にあったサービス内容の検討を継続している。モニタリングの結果をご家族に説明し、ご要望を確認する機会にしている。現状に即した介護計画であるよう心がけ継続している。	一人ひとりの生活スタイルや馴染みの習慣が引き続き活かせるプラン作りに全職員が関わりながら計画作成担当者が立案している。定期的なモニタリングで評価し、新たな課題を検討しながら家族の同意を受けて次のプランに繋げている。担当者は家族への説明時に専門用語を使わずわかりやすく表現するよう心がけており、自らが確認のサインをされる入居者もおられる。		
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	気づきや変化は個別記録に記載するようにして、情報の共有を行っている。また、日々にケアに反映できるように申し送りを活用し、実践に活かせるよう努力している。			
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	ご本人やご家族に必要なニーズについては、柔軟に対応できるように、全職員が心がけ多方面から検討するようにしている。また、幅広い支援がご本人にとってより良いと考えている。			
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	入居者の重度化により、ご本人の力を引き出す生活より、安全を守る生活が主体になっている。地域の資源を活用するということは、地域の方に入居していただけるように今後も地域に貢献してゆきたい。			
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	個々の入居者の馴染みの主治医が診てくださっているため、安心して医療が受けられると感じている。また、往診や受診にも看護師が立ち合い適正な医療がうけられるよう支援を継続している。	個々のこれまでの主治医による医療支援が継続され、入居者によっては今後の連携や協力依頼について家族と共にかかりつけ医に相談が行なわれている。看護師の立ち会いによる受診や往診支援、家族との連携により高齢化や重度化した入居者が穏やかな時間を過ごせるよう日々の健康管理に努めている。		
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護体制は専任の看護師を配置している。介護職員と同じ日々の関わりをしてもらっていることから、職員の信頼も高く、早期の気づきであっても随時、相談できるような体制が図れている。また、24時間体制で連携が図れるようにしている。			

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院された場合は、出来るだけお見舞いに行き、入院中の状態も把握できるように心がけている。このことにより、早期退院がスムーズにできるように職員全員で協力している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所までできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域との関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	終末期については、ご家族のご意向を十分に聞き、緊急時の対応や主治医との連携を図れるように、細心の注意を図りながらチームで支えることができる体制を設けている。	ホームの取り組みとして、重要事項説明書の中で説明を行い、家族の協力の必要性も伝えながら、感謝の思いを込めて看取り支援が行なわれている。管理者は一人ひとりの入居者が最後の時間を大切な家族との絆が再確認できる場面であるようにと語っている。今年度ホームで終末期を過ごされた方へも、寝姿への心配りや、ピンと伸ばされたシーツ、寝具など細やかな配慮の中に尊厳を大切に家族の協力のもと看取り支援が行なわれた。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変時の対応は研修会等で勉強できるようにしていると共にマニュアルを作成もしている。しかしながら、職員が緊急時となった場合の実践力に不安を抱えている。そのため、今後も勉強会を含めた学ぶ場を多く設け、不安除去に努めたい。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年に2回に消防訓練を定例化している。地域の自治会や地域自衛消防団と連携しながら実施している。また、防火意識を全職員で持ち、定期自己点検や、屋外の可燃ごみの放置などがないように放火対策にも注意している。	年二回の消防訓練をはじめ、地震を含む自然災害について研修会や日常的に話を行い職員の意識付けを図っている。まずは自身のホームから火を出さぬようコンセントや建物周りの点検を行っている。消防団の夜警回りや、地域消防団員でもあるホームの納入業者による連携は心強いものとなっている。備蓄も水・日常的な食を準備している。	管理者は自然災害について地域のハザードマップの確認を行ないたいと語っている。今後も現在取り組まれている災害対策が強化、継続される事に期待したい。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	その方生きてこられた人生を理解し、尊敬を持って寄り添えるケアの実践に勤めている。プライバシーや言葉遣い・態度について定期的に研修会を設けているが、常に一定の質を保つことは難しく、出来るだけ個人の尊重ができるケアの実践に勤める。	入居者一人ひとりのこれまで歩まれた歳月を理解し、誇りや尊厳を大切にしたい支援を全職員が共有し実践に繋げている。ホーム内の研修をはじめ、管理者は職員の立ち居振る舞い全ても、入居者にとって威圧感になる場合もあるなど、細やかな点も事例を通し日々指導を行っている。呼称については本人・家族の意向も確認し対応している。また、守秘義務について書面や研修会の中で徹底している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	入居生活で強制することは無い。本人の気持ちを表すことが出来るようにケアの在り方を、表情・言葉に耳に傾けるようにしている。職員が押し付けるのではなく、ご本人が実践できるようなケアに努めたい。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	心身を安定した状況に保つためにできるだけ規則正しい生活が送れるように支援している。食事時間などは決まっているがそれ以外は出来るだけその方のペースで柔軟に対応するようにしているがケアは合理化できないので全て行っている訳ではない。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	季節ごとにご家族にご協力いただき、おしゃれできるように支援している。また、入居者の理美容や入浴後のスキンケアにも気を配っている。その人らしさの一つに身だしなみがあると考えます。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事は楽しみの時間であることを職員は理解している。個々の能力に合わせた役割を担っていただけるようにお声かけをしている。食事の盛り付けや準備にも参加していただけるように楽しむ支援になうように心がけている。	食事支援の在り方として、“食事は楽しみの時間である”という事を調理担当者も含め職員一人ひとりが心にとめ日々の支援にあたっている事が、メニューや盛り付け、見守りや介助風景からも確認された。季節の行事食やこれまでの食生活への対応(朝のパン食)、美味しいお茶を楽しみたい！の希望に緑茶や玄米茶を準備している。また、嚥下状態からミキサー食へ変わる場合も家族へ説明を行っている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食生活は、身体づくりの基本になるため、過度なカロリー摂取を避け、栄養のバランスを考慮した食事の提供を行っている。飲み物は、数種類用意し、一日1500ml摂取を目標に支援している。内容については記録に残し継続的支援ができるようにしている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、必ず個々の能力に合わせた口腔ケアを実施し、異常の早期発見に努めている。重度化に伴い、ガーゼを手に巻き口腔ケアをおこなうようにしている。口腔内の確認を行い、トラブルがあった場合は歯科につなげている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	日中は全員トイレに誘導するようにしている。重度化に伴い1人で移乗させれない場合は、2名で対応するようにしている。トイレで排泄できることが、尊厳の保持に繋がると考えている。	日中は全員トイレでの排泄を個々の状態に応じ支援している。また入居者が気持ち良く使用できるようトイレ内は清潔を心がけ、夜間のみ使用されるポータブルトイレは丁寧に洗浄を行った後、日中は外に出し天日干しする他、トイレ内に個別の排泄用品を置く場合収納ケースに入れ必要分のみの保管とするなどプライバシーや尊厳に配慮し対応している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	高齢になると運動量が減り便秘になりやすくなるそのことを職員は理解した上で、食物繊維を多く含んだ食事や乳製品・青汁・水分を多く摂取していただけるように努力している。それでも改善できない方は、定期的の下剤を使用している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入居者の重度化に伴い、個々の希望日・時間に入浴することが難しく、職員が2名でリフトを活用しないと安全に入浴できない状況である。そのため、曜日を決めているがご本人の状況に合わせて入浴のタイミングを決めている。数種類の入浴剤を用い入浴を楽しんでいただける工夫をしている。	入居者が重度化にある中、本人の希望も大切に会議の中で、チームワークや身体への負担、皮膚状況などを検討し、リフト浴も使用しながら安全な入浴支援に取り組んでいる。入浴剤を使用する日は浴室前に“変わり湯の日”の掲示を行い温泉気分を演出したり、ゆず湯も三日間実施することで全員が季節風呂を味わえるよう配慮している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	重度化に伴い、日中に休息を入れないと食事が入らない方がいらっしゃるため個々の合わせた体力で昼夜逆転にならない程度のお昼寝を取り入れ疲労回復に努めている。寝具を天日干しし、できるだけ快適な睡眠になるようにしている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	職員が薬の内容を把握するため、個々の薬事情報をファイルし、どのような薬を飲まれているか理解できる仕組みをつくっている。また、薬は3回確認するようにしており誤薬のないよう職員全員で取り組んでいる。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	重度化に伴い、全員で外出することは数年前より行っていないが、個々の性格を理解し、役割や楽しみごとの支援をしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	重度に伴い、ご自分から外出の希望をされることがなくなってきた。しかしながら、季節や体調を考慮し外出できるよう行事の計画を行っている。ご家族の協力や地域の皆様の協力を得ながら今後も計画したい。	敷地内を散歩しながら菜園や果樹(みかん・パンペイユ)の色好きを楽しんだり、改修されたブドウ棚のデッキで日光浴やお茶の時間を過ごすなど、日常的に外出や外気浴を支援している。法人主催の運動会で沢山の周囲の応援の中、百二歳の入居者も力いっぱい玉入れに参加されている。また近隣の散歩や教会・買い物、銀行に出かけた帰りにおやつを購入するなど個別の外出にも柔軟に対応している。	入居者の方々の高齢化や重度化に伴いなかなか外出の希望を出されない中でも、敷地内やデッキなど外気に触れる機会を大切に取り組みされており、今後も体調に配慮しながら家族や地域の方々の理解や協力のもと外出の機会が展開される事に期待したい。
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金の管理は個々の能力とご家族との話し合いで支援している。ご家族の協力が不可欠で、外出した際は、お金が使えるように支援している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	職員は、ご家族や大切な方に対する入居者の気持ちを理解した上で、電話や手紙でのやりとりが出来る支援を行っている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	居心地の良い空間づくりを心掛けており、室温・湿度にも気を配っている。リビングには音楽をかけ心地よい環境にしている。また、玄関やリビングには季節のお花を活け季節感を感じれるようにしている。共有空間は掃除を徹底するようにしている。	ホーム内は季節の花々や観葉植物・心地よい音楽・手作りカバーが掛けられたソファや椅子の設置など入居者が自分のペースで居心地良く過ごせる空間が作られている。また、職員の穏やかな語りかけや誘導などソフト面の環境がより居心地の良さに繋がっている。入居者の作品に加え、これまでの利用者や地域の方の作品(絵や焼き物)が大切に飾られるなど過去を忘れず、今に活かしながら人々との繋がりを大切にするホームの姿勢が感じ取れる。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	リビングには5タイプの椅子を用意している。入居者が思い思いに過ごすことのできる居場所づくりを行っている。また、1Fテラス・2Fテラスにもテーブル・椅子等を置き、どの空間でもゆっくり過ごせるよう工夫している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのもを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	ご本人の馴染みの家具を持ち込んでもらい、落ち着ける居室づくりに取り組んでいる。物の配置はご家族と相談した上で決めている。個人のプライバシーが保たれる居室になるよう今後も努力してゆきたい。	ホームと家族と一緒に取り組む“より家に近い過ごしやすい居室”は、馴染みや必要な品々(タンス・時計・家族の写真・仏壇・湯茶セット等)の持ち込みや換気や掃除、布団の日光干しが小まめに行われている。荷物があふる事で不安になられる方へは、居住ということではなくコートや壁にかけ毎日ホームを訪問していただけるような環境を作る等、その方に応じた居室作りが行なわれている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	個々の力を理解し、わかる工夫やできる工夫をしている。わかる工夫として、日めくりカレンダーやタンスへの表記の実施。できる工夫として、手すりを整備しバリアフリーにすることで建物内を自由に過ごすことができるように工夫している。		